「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 29 年 09 月 05 日
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏　名	井上　漱太

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

東京大学駒場キャンパス

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

行動 2017（日本動物行動学会及び他４大会合同大会）参加及び発表

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 29 年 8 月 30 日　～　平成 29 年 9 月 1 日　（3 日間）

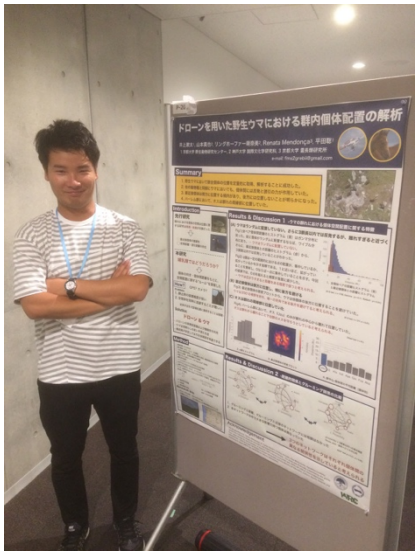
４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず１枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

８月下旬から９月１日かけて東京大学駒場キャンパスでおこなわれた「行動 2017」に参加及び発表について報告する。本大会は日本動物行動学会だけでなく、動物心理学会、応用動物行動学会、日本家畜管理学会、行動内分泌学会との合同学会だった。昨年の日本動物行動学会における私の発表は解析途中だったこともあり、満足なディスカッションをおこなうことができなかった。今回はある程度完成した結果を発表することができたので、十分内容に踏み込んだ議論をおこなうことができた。特に印象深かったのは、ウマの群内での雄の空間配置に関しての意見だった。自分なりの解釈を話した後の会話だったのが、「単なる個人的な意見では、・・・ではないですか。」と聴衆の方々が話してくれるのだが、それが各人 180 度異なる方向だった。つまり、まだ十分な議論をおこなう余地を残した結果であり、それはある程度人の予想とは異なる結果になる可能性を秘めているということだ。他の結果に関しても、親切に様々な意見を出してくれ非常に興味深かった。やはり、自分一人で、もしくは決まったメンバーで研究を進めていると、考え方に制限ができてしまい柔軟な発想が損なわれいていると感じた。発表する機会があるならば積極的にどんどん発表するべきだろう。

ほかの発表者の発表も幅広い分野にわたるものであり、自分の研究とは別に興味深いものだった。このような幅広い分野の発表を聞いていると、自分の興味に関して改めて考える良い機会になった。そして、徐々に学会というものの雰囲気に慣れてきたこともあり会話自体も去年に比べたら弾んだような気がする。何人かの人には手法に関して教えてもらう約束もできたので、非常に実りの多い大会だった。同世代の人も多く参加しており、顔、名前を知っておくと後々の研究生活に活かす機会があるかもしれない。来年もぜひ参加したいと思えるような良い大会だった。



ポスター発表の様子

６．その他（特記事項など）

本出張をサポートしていただいた PWS、PWS 支援室の皆様には厚く感謝申し上げます。